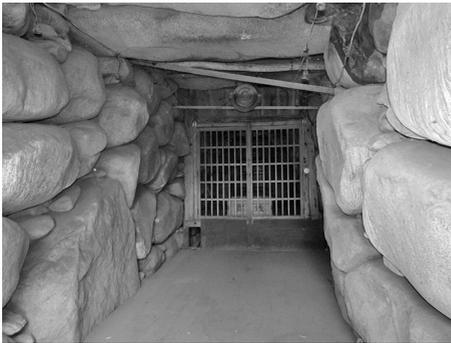


いきたいと思う。

古代の各国の位置・規模や範囲を、人々はどのように認識していたであろうか。我々は今の日本地図を思い浮かべながら、古代の国のあり方を想像していることが多いが、鎌倉時代末～室町時代初頭頃の日本古地図（一四世紀初頭）を見ると、相当曖昧な概念で、各国の形や日本全体の姿を描いていたことがわかる（第1図）。

その理由は、国・郡・郷などは人々の数や集落・水田・耕地の範囲をもとに各国を描いていたからに他ならない。今の地図にあるような、山の尾根や川をもとにした各国の境界線はなかった。

古代の国は、各地域集団の人々が営んだ生業範囲がもとになり出現している。最近の発掘調査で、文献だけではない甲斐国古代史が明らかになりつつある。



第2図 姥塚古墳（笛吹市御坂町井上）

1 甲斐の出現

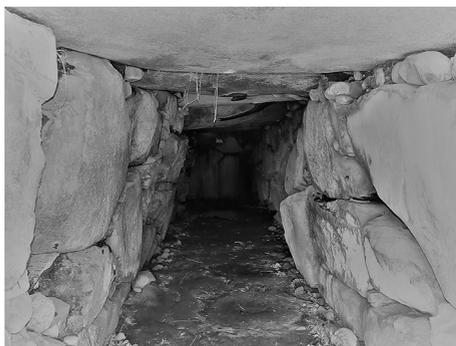
甲府盆地での有力勢力は、四世紀に入つての巨大古墳の築造により、その出現が認められるようになる。甲府盆地南西部の曽根丘陵に出現した甲斐銚子塚古墳をはじめとする前方後円墳群は、大和政権派遣の豪族か大和政権と結んだ甲府盆地有力者が築いた巨大墳墓であり、五世紀～六世紀には甲府盆地一円にその勢力を拡大する。六世紀後半には甲府盆地の東西に姥塚古

内の各地勢力が顕在化した第二の段階で、甲斐国の基礎ができたのであろう。

2 律令国家と甲斐国の成立

六四五年、大化の改新(乙巳の変)により、それまでの天皇家や豪族支配による部民制が、天皇を中心とした律令制へと改められると、各地域に国・郡・郷最初は国・評・里)が定められ、旧来の国造勢力や皇族・豪族の人民支配(部民)に代わり、天皇を中心とする公地公民制がしかれた。これが律令制である。

甲斐国は甲府盆地を中心に、山梨・八代・巨摩郡に分けられ、後に桂川流域の都留郡が加えられた。山梨・八代郡



第3図 加牟那塚古墳(甲府市湯村)

墳(笛吹市御坂町、第2図)と加牟那塚古墳(甲府市湯村、第3図)という、新たな巨大横穴式石室を持つ円墳が築かれるようになる。

おそらく四世紀に甲府市巾道地域に出現した甲斐国造勢力が、東西に分かれて発展し、六世紀後半には並立する存在となったのではなからうか。この古墳群は、七世紀にはさらに勢力が分散化して、盆地東部では八代地域や一宮地域、春日居地域、山梨市域などに分かれ、盆地西部では甲府北部、甲斐市の敷島・赤坂台地域、南アルプス市域などに広がる。この時代が甲斐国

は本来一つの勢力であったが、その豪族の勢力をそぐために二分割され、巨麻郡は、高句麗系渡来人を多く受け入れたために高麗Ⅱ巨麻郡として成立した。また、都留郡は都と結ぶ官道(甲斐路Ⅱ御坂路)の駅や道の維持管理のための地域と、相模国から割譲された地域を合体したものと想定されている。

甲斐国の郡(評)・郷(里)の編成は、平安時代に編纂された『倭名類聚抄』を見ると、各地での地域勢力が再編されたことが想定できるが、そこに記された郡(評)・郷(里)が最初から一度に出現したのかは疑問である。おそらく、奈良時代以前から時間をかけて編成され、平安時代の初期にまとまったものであろう。

なお、古墳時代、六世紀後半の盆地東西の勢力は、姥塚古墳と加牟那塚古墳に象徴されるが、「大化の改新」以後の盆地東西地域において、山梨郡下の白鳳時代寺院「寺本廃寺」「川田窯跡」と、巨麻郡下の甲斐市「天狗沢窯跡」の存在は、六世紀後半から八世紀前半まで続いた両地域の勢力並存を想起させる。

3 『倭名類聚抄』に見る甲斐国

① 国府と国衙

『倭名類聚抄』(以下「倭名抄」と略す)には、国府は八代郡にあると記される。これは平安時代の国府であるが、笛吹市春日居町国府の地名由来は、奈良時代の国府所在地を示していると想定されてきた。山梨郡は甲斐国四郡のうち最大の一〇郷を管下にもち、平安時代の『倭名抄』では東西五郷ずつに分けられている。当初の国府は最大数の郷を管理下に置く山梨郡内に置かれたとするのが、理解しやすい。

ところが『倭名抄』編纂の平安時代には八代郡に置かれている。しかも、山梨郡と八代郡の境である現在の笛吹市御坂町国衙に置かれたと推定される。このほかにも国府推定地があるが評価は低い。